

原因不明の肺炎の噂

武漢で原因不明の肺炎発生

2019年12月26日、武漢市にある湖北省中西医结合医院の近所に住む、夫婦2人の発熱患者が診察にやってきました。この2人を診察したのが、呼吸器と重病医学科主任の張継先医師。中国の公式発表では、この医師が最初に新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の患者を発見して報告した医師となっています¹⁾。このケース以外にも、論文などでは2019年12月1日に発症した症例も発表されていますが、正式に当局へ報告されたのは、この張継先医師のケースが最初だったようです²⁾。

張医師が胸部CT画像を見ると、従来のウイルス性肺炎とはまったく異なる特徴を持っていたことから、夫婦に対し子どもも連れてくるように指示しました。子どもに症状はなかったものの、胸部CT画像を見ると、やはり同じような画像上の特徴が見られました。普段の診察では、家族の一人が感染症に罹り、家族に付き添われてくることはよくありますが、家族全員が感染したということは、何らかの伝染力の強い感染症が発生しているに違いないと感じたといいます。かつてSARS治療にも参加した経験のある張医師は異変を察知し、12月27日に現地当局に報告しました。

武漢における新型コロナの最初の発見は、中国ではこのように報道されています。その後、事態はさらに進展し、12月30日に、武漢市中心医院眼科の李文亮医師が、「海鮮市場で7例のSARSが発生した」とWeChat（中国でメジャーなSNS）で発表する一方で、12月31日には武漢市が「原



写真1 新年の上海竜華寺。上海の名刹で、三国時代に呉の孫権が母親のために創建したといわれています。このときはまだ誰もマスクをしていません。

因不明の肺炎で27例が感染したが、人から人への感染はない」と公表したことで、われわれ上海で働く医療関係者の間でも段々と話題になってきました。

武漢の原因不明の肺炎に関する情報は、当時、上海でもまだ少なく、「人から人への感染はない」という当局からの発表もあり、われわれも12月下旬から1

月中旬にかけてまだそれほど深刻には考えていませんでした。2019年の年末から大晦日のわが家は上海で過ごし、いつものようにNHKの紅白歌合戦を楽しみました。2020年1月1日は、例年通りに上海竜華寺へ初詣に行っています。お寺も例年通りの賑わいでした。もちろん、当時の写真を見返すと、人混みの中でマスクをしているような人はほとんどいません。お寺も通常通りに参拝が可能で、多くの人で賑わっていました（写真1）。

一方で、1月2日に武漢ウイルス研究所が、ウイルスの遺伝子解析を行い、1月5日にはWHOが中国政府からの報告をうけて、中国で原因不明の肺炎が発生していることを公表しました。私の患者さんからもちらほら肺炎に関する問い合わせが来るようになり、インターネットなどを通じて上海在住の日本人の間でも徐々に知られるようになってきました。また、上海市公共衛生臨床センターでも、武漢で発生した原因不明といわれたウイルスの遺伝子解析が行われ、SARSと遺伝子が89.1%類似しており、公共の場所で警戒する必要があると報告しました。この論文は³⁾、その後2月3日に『Nature』でもオンラインで発表されました。

当時の私のTwitter (<https://twitter.com/mdfujita>) を振り返ると、1月

6日に、武漢で発生した原因不明の肺炎は、「とりあえず鳥インフルエンザ、SARS、MERS、アデノウイルスなどではないとのこと。今のところ医療関係者への感染もないとのこと。まずはなるべく人混みは避けましょう」とツイートしています。実はこれが、私が発信した新型コロナに関する初めてのツイートになります。当時の発表によると、原因不明のウイルス性肺炎に感染した人は59例、うち7例が重症で、最も早く発病した人が2019年12月12日、最も遅かった人が同年12月29日で、濃厚接触者163例が医学観察中。一部が華南海鮮市場の関係者で、医療関係者への感染者は出ていない、という報道でした。

1月7日に新型コロナウイルスが原因であることがわかりました。武漢では1月10日に最初の死者が発生し、1月11日にWHOがこの疾患を「COVID-19」と命名しました。実は上海市でも1月5日に上海市公衆衛生臨床センターで、ウイルスの遺伝子が解析されています。こうした中国側の情報は、1月11日にWHOと共有されていました。

武漢から800キロ離れた上海では

元旦が過ぎると、中国では旧正月（春節）に向けて年夜饭（忘年会）のシーズンに入ります。われわれの病院でも1月12日に盛大に開催されました。中国式の忘年会は、大広間にたくさんのテーブルを並べて賑やかに行います。例年、豪華な景品が当たる抽選会などもあり、職員たちも楽しみにしており、絶対に欠かすことのできないイベントになっています。こうした宴会も、この段階ではまったく問題なく実施されていました。

その後、私は1月13日～16日まで大阪・東京へ出張に出かけました。まさかこの出張が、その後長らく日本へ行けなくなる、最後の出張になるとはその当時は考えもしませんでした。それぐらい当時はまだ日本の関西国際空港も上海の浦東国際空港も通常通りに運用されており、到着後の検疫や通関も簡単で、迅速に到着ロビーに出てくることができました。



写真2 コロナ禍前の最後の忘年会。コロナ禍以降、こういう大規模な忘年会はすっかり影を潜めました。もちろん、このときは「来年も忘年会で会おう!」とお互い声をかけて別れたものです。



写真3 コロナ禍前の上海地下鉄の帰省風景。大きな荷物を持っている人が多いです。まだマスクをしている人はほとんど見かけませんでした。

た。中国に戻ってくるときにはPCR検査や2週間の集中隔離が日常となくなってしまったいまとっては夢の世界のような話です。

ただ、私が日本へ短期出張に行っている間にも、武漢では刻々と状況が緊迫していきました。1月14日に、武漢ではリスクは低いが、限定的にすでに人から人への感染が始まっているという武漢市当局の発表が出されました。

それでもまだ、武漢から800キロほど離れたわれわれ上海での生活は普段通りで、私が顧問をしている中医学のAIソフトウェア会社の忘年会に招待され、食事に行ってきました。会場では様々な出し物もあり、大いに盛り上がっていました(写真2)。ただ、忘年会終了時に発せられた、「原因不明の肺炎にはお互い気をつけましょう」という司会者の締めの挨拶が印象に残りました。また、この時期に上海地下鉄に乗ると、春節に向けて帰省する人で混雑していました(写真3)。その一方で、WeiboやWeChatなどのSNSをのぞくと、武漢の発熱外来の様子が伝わってきて、すでに医師らが白い防護服で身を固めて診察している姿を目に

するようになってきました。

この頃から、中国各地で武漢からの輸入例が報告されるようになりました。そしてついに、1月20日に上海市で初めてとなる確定例が確認されました。56歳の女性で、1月12日に湖北省武漢から上海市に到着したものの、発熱と怠さで1月15日に上海市内の同仁医院に入院し、1月20日に輸入例確定例として確認されました。そして、同じ1月20日に2003年にSARSが流行したときに中国で大活躍した中国工程院の鐘南山院士が「人と人との間で感染が発生している」ことを明言しました。このときのインタビューは私もはっきりと覚えています。当時、広東省で発見されていた2例は武漢に行っておらず、家族が武漢に行き、戻ってきて感染したことがわかっており、そこから人から人への感染があると判断したようです。ただ、当時の見解では、SARSほど感染力は強くないとコメントしていました。さらに、1月21日には武漢でも15例の医療関係者が感染したというニュースが入ってきて、このうち1例が重篤な状態になっていました。医療関係者の感染が続くということは、尋常ではない事態が発生していると周りも気づき始めます。この一報を聞いて、上海の医療現場にいるわれわれも「いよいよ来たな」と、強く感じました。

思えば、2003年SARSのとき、私は上海中医药大学附属竜華医院に院生として所属しており、事態が急変していく様子を刻々と耳にしていました。当時、インターネットはありましたが、現在のようなSNSはなく、情報収集に苦労したことを覚えています。そして、感染者の数が日に日に増えていき、恐怖を覚えたことが思い出されます。当時の上海では、暑い暑いと言いつつも、タクシードライバーは真夏でもしっかりとマスクをしていました。当時はいまと違って、布マスクをしている人が多かったです。SARSでは中国大陆で5,327例の感染が確認され、死者は349例でした⁴⁾。ただ、奇跡的に上海では大流行を免れ、市中感染者も10人以下に抑えられました。今回もふと、当時のことが頭によぎったのでした。

【引用文献】

- 1) 疫中日志：谁拉响了武汉疫情防控的警报？ 澎湃新闻（2020.4.24）（https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_7108406）
- 2) 谁是第一个基因检测出的新冠肺炎患者？ 财经（2020.2.19）（https://mbd.baidu.com/newspage/data/landingshare?context=%7B%22nid%22%3A%22news_11015042654231318258%22%7D&isBdboxFrom=1&pageType=1&rs=2398964404&ruk=mHTlgtc8xL9lJEC18sMHig）
- 3) WuFan et al：A new coronavirus associated with human respiratory disease in China. Nature（2020.2.3）（<https://www.nature.com/articles/s41586-020-2008-3>）
- 4) Summary of probable SARS cases with onset of illness from 1 November 2002 to 31 July 2003（2015.7.24）（<https://www.who.int/publications/m/item/summary-of-probable-sars-cases-with-onset-of-illness-from-1-november-2002-to-31-july-2003>）

コラム 中国における新型コロナウイルス肺炎の扱い

新型コロナウイルス肺炎のことを、中国語では「新型冠状病毒感染肺炎（略して新冠肺）」と言います。

2020年1月1日に中国の衛生当局は、2020年1号公告で、『中華人民共和国伝染病防治法』の規定により、新型コロナウイルス肺炎を乙類感染症に指定する一方で、予防や感染管理に関しては甲類感染症に準じて対応することを明らかにしました。中国では法定感染症を甲乙二類に分類していますが、甲類感染症は、法定感染症の中では最も警戒レベルが高く、コレラとペストの2種類が指定されています。一方の乙類感染症には、SARS・狂犬病・HIV・結核・ Deng熱・梅毒・麻疹、そして今回の新型コロナウイルス肺炎など約25種類の感染症が含まれます。今回、新型コロナウイルス肺炎を甲類感染症に準じて対応することになったことで、『中華人民共和国伝染病防治法』に基づき、隔離治療や濃厚接触者の隔離観察などが厳格に実施されることになりました。さらに、もし個人や企業が法律の規定に反して感染症の拡大や流行、もしくは他人の健康や財産などに損害を与えた場合は、法律に基づいて民事責任が追求されます。また『上海市伝染病防治管理弁法』では、個人が強制隔離や医学観察に従わず、他人の健康や財産に損害を与えた場合は、民事責任が追

求されます。

同時に新型コロナウイルス肺炎は、『中華人民共和国国境衛生検疫法』も適用されました。ここでは、海外の疫区から中国に入学する場合は、隔離が必須となり、隔離期間は医学検査結果に基づき判断され、とくに疑似例に関しても感染症の潜伏期間に応じて医学観察する必要があると定めています。こうした規定を守らなかった場合、刑事責任を追及されることもあります。

中国が新型コロナウイルス肺炎を早期にコントロールできている理由の一つに、私はこうした法制度を早い段階で適用したことも密接に関係していると考えています。SARS も乙類感染症ですが、当時も甲類感染症としての防疫対策がとられました。

ちなみに、日本で一類感染症（エボラ出血熱、痘瘡、ラッサ熱など）に指定された感染症では、建物の立ち入り制限や封鎖も十分にあり得ますし、同様の対策は中国でも行われました。ここからもわかるように、感染症対策と政治体制とはまったくの別問題であり、感染症の特性をどう捉えて対策をとるかということが重要になってきます。

乙類感染症に指定された新型コロナウイルス肺炎に関して、中国がなぜ2020年1月という早い段階で、防疫体制に最高レベルとなる甲類感染症対策を採用したのか？ その理由はいまとなっては色々理解できるのではないかと思います。

中国の法定感染症に関する情報は、中国疾病予防コントロールセンター（Chinese center for disease control and prevention : China CDC）のホームページ（<http://www.chinacdc.cn/jkzt/crb/>）を参照。